翻訳

フィリップ・デイヴィス　『バーナード・マラマッド―ある作家の生』(2)

奈良県立医科大学医学部看護学科
勝井 伸子

Translation of *Bernard Malamud: A Writer's Life* (2)

Nara Medical University School of Medicine Faculty of Nursing
Nobuko Katsui

1951年12月:母と父

それ以前に一度、1951年の11月の末か12月の初めごろ、マラマッドは、小説外の世界で、意図的に中立性を装って家族のケースヒストリーのようなものとして、自分の幼少期について書いたことがあった(HRC20・2)。その物語はこのように語られた。

> 父のマックスは食料品店を営んでいた。1905年か6年にロシアからアメリカにやってきた。ほとんど教育らしいものは受けてなかった。おそらく中学レベル(グラマースクール)くらいだっただろう。父は思いやりのある人間で、心優しく、時に頑固で、基本的には野心のない男であったが、家族にはよくしてくれた。基本的に悲観的な傾向があり、後年は将来の望みや計画に対する根拠のない悲観的な反応を示してはバーナードを憤慨させたものだった。ある意味で、彼はまるでロシアの小説中の人物のようだった。……ロシアではひどく貧しく、単純で辛い仕事ばかりだったのは明らかだった。彼が営んでいた食料雑貨店はそうした単調で辛い仕事の延長だった。朝6時に起きて夜10時、11時まで、週7日働いていたが、それが彼がなじんでいたただ一つの生き方であり、彼が尊重できるただ一つの生き方だったことは明らかだった。(HRC 20・2)

その後、1976年のマラマッドの草稿(Family History)ではその記述はもっと細部にわっている。マックス(元はメンデル)マラマッドは1885年に生まれ、関係が濃密な四人の兄弟の末弟であり、姉が二人妹一人いた。彼は、ウクライナのユダヤ人強制居住地区（ペイル）の規制下にあるカメネッツーポドロスキ近くの貧しい村（シュテトル）(訳注特に第2次世界大戦までの東欧において、東欧系ユダヤ人（アシュケナージ）のコミュニティ)で青年時代を送った。強まりつつあった反ユダヤ主義とユダヤ人(ポグロム)虐殺への動きのさなか、日本との戦争に備えたロシア軍の徴兵を逃れるために、彼は干し草の荷車に隠れて国から逃げた。彼の状況は格別例外的であったわけではない。1881年に起きたリベラルな皇帝アレキサンダー2世の暗殺から第1次世界大戦勃発までの30年の間に、より厳しいアレキサンダー3世の治世にあって、東欧系ユダヤ人の三分の一が母国を出たのだった。現代版出エジプト(エクソダス)とも言うべき大量出国であった。1880年にニューヨークにいたユダヤ人は8万人だったが、1910年には110万人になっていたのだ。

マックスはアメリカにたどり着くと、ブルックリンの5階建ての安アパートに住んでいる信心深い兄のダディ(Dudye)夫妻のところに身を寄せた。しばらくの間、いまやモリス・コーエンという名前を名乗っているもう一人の兄、マティスと、共同経営者アイザック・シュマックラーが小売商に卵とバターを卸している仕事を手伝っていた。この二人の兄はとりわけアメリカへ同化することに熱心で、向上心に燃えて厳しい労働倫理と自由の理念に入れ込んでいた。マックスのほうは、ある時点でマティスと険悪な関係になり、結局、シュマックラーの弟ベンと協力して、ブルックリン、ボローパーク15番街に面した自分たちの「しゃれた」食料雑貨店を開くことになった。

マックスが、母国、カメネッツーポドロスキで1888年生まれのバーサ・フィデルマンと旧知の間柄であった可能性はある。彼女は四人兄弟で、ラビの祖父を持ち、父は町の主任ショヘート(律法にのっとって動物を屠殺する職業)を務めていたという、良い家柄の出であることを誇りにしていた。彼女の父、バルークにちなんで、バーナード・マラマッドは命名されることになった。彼女の兄弟、カシールだけがアメリカに来て、イディッシュ語演劇で役者にせりふをつける仕事（プロンプター）をしていた。彼女の二人の姉妹と両親は母国に残っていた。バーサは母を恋しがって、涙ながらの手紙をよく書いてい

た。

ブルックリンで紹介されたか、あるいは改めて紹介しなおされたかの後、バーサとマックスは 1910 年、彼女がアメリカにやってきたその年に結婚し、ブルックリンのウィリアムズバーグ側の外れにある、イタリア人やアイルランド人も交じっているが大多数はユダヤ人が住んでいる、見苦しくない町であるフラッシング街に新居を構えた。マックスは 1911 年の時点でブリッツキーという名の男と共同で食料雑貨店を買い取っていたかもしれない(LCII11・14)。バーナードは 1914 年に、ユージーンは 1917 年に生まれた。1919 年には、まだ若い一家は 15 番街のやや高級な食料雑貨店へと移った。しかし、一年も経たないうちに、マラマッドが信じるところでは、共同経営者ベン・シュマッカーは金を全部持ち逃げして、マックスは店を売り払わざるをえなくなった。

それ以前に不仲になっていたにもかかわらず、兄マティスに助けられ、グレイブズエンド街 1111 番地にはるかに小さい店を買った。この地名はフラットブッシュの東に面した墓地の近くだったのでそう呼ばれていたのだが、新しい共同経営者はモリス。ウォリンと言い、バーサは彼のことも信頼していなかった。その店も失敗すると、マックスはウィリアムズバーグに戻って小さな店を構え、家族はエルリー通りに住んだが、その家は(マラマッドはおぼろげに覚えていたが)「廊下にトイレがあっ」たが、その後またウォリンと共同でチャーチ街と東 4 丁目の角に移ることになった。ここもまたフラットブッシュ地区(訳注　フラットブッシュはブルックリン中南部の地区でかつて郊外住宅地として人気のあった地区)で、はるかに非ユダヤ人（ジェンタイル）の多い地区でありユダヤ人の商店主たち以外は、主としてアイルランド人とドイツ人家族が居住していた。1920 年代のどこかの時点で、マックスは共同経営者との事業にうんざりしてロジャーズ街とアルブマールロードの角に一人で店を構えたのだが、結局最終的には 1924 年から 5 年ごろにグレイブズエンド街 1111 番地に舞い戻ってくることになった。そこで、マックスはドイツ風のデリカテッセンを構え、安物の缶詰、パン、野菜、いくらかのチーズ、調理肉などを売った。キリスト教徒の店と違って、彼は日曜にも店を開けた。ハムを売ってはいたものの(訳注　豚肉で作るハムはユダヤ教では不浄であり禁忌)、ユダヤ教の祝日には時折店を閉めることもあったが、それは非ユダヤ人たちに自分たちがまだユダヤ人であることを示すためであった。

同級生だったバート・ラッシュは出版されなかったインタビューでマラマッドの息子ポールに店のことを次のように語っている。

> 店は格別変わったものじゃありませんでした一典型的な通りに並んだ店の一つで、店の上にアパートが一階分か二階分乗っているというつくりです。屋根の右手には高架鉄道が走っていたから、それほど高い建物じゃなかったんです。建物と高架鉄道を隔てていたのは歩道と一車線の車道で、車が通ると両側には 1 フィートずつしかすきまがないという広さでした。あとは線路を支える巨大な鉄とコンクリートの柱がずっとあるんです。いつも音がうるさいし、日光を遮っていました。

グレイブズエンド街の薄暗がりの中にマラマッド一家は暮らしており、後にこの通りはその名をマクドナルド通りと変えることになるが、グレイブズエンド(訳注　グレイブは墓場の意)はマックスの商売の経歴にはふさわしい名前だった。レヴィン夫人は 10 歳の頃の思い出として、30 年代初期にマックスと二度目の妻が「かなりわびしく陰鬱な店」にいた様子を語っている。

> そのころ彼らが何歳くらいだったのかわかりませんが、子どものころ彼らが老いて悲しげに見えました。・・・私の姉はあの女のひとは店の表にずっと座ったままだと言っていました。店には長いカウンターと短いカウンターがあって、短いカウンターのほうで接客をしていました。彼らの動作はゆっくりしていて、品物の値段は紙袋の上に足し算して記入されていました。当時はそれがあたりまえでした。壁に沿って置かれたケースの中の容器からバターは切り分けられていました。ぼんやりとですがミルクを入れてもらうのに、容器を家から持って行った記憶があります。……彼らはどちらもにこりともしませんでしたし、どうしても必要な場合を除いて客と話したりすることもなく仕事だけをしていました。食料品を入れた棚は上のほうにあって、長い竿を使って下ろさなければならなかったことも記憶に残っています。

マラマッドは「大恐慌前には商売はどこもぱっとしなかった」と言い、言葉少なに「その後は悪化した」と付け加えた(HRC 29・6)。

バーサがまだ生きていて家庭にあったときでさえ、のどかな日はほとんどなかった。「マックスとバーサは愛情深い親だったので、子ども時代は幸せなものだったけれども、家庭生活も文化的な面においても貧弱なものだった。」店の上階と裏手で生活していたので、家庭生活というよりは店での時間にすべてを占められていたのだ。食事は店の奥でとっていた。マラマッドの言葉によれば、「誰も飢えてはいなかった」が、別の次元では、「私の飢えはすでに深く果てしないものとなっていた」(HRC 33・8)。バーサはあまりに子どもにかまけていて滅多に外出はしなかったが、幼いマラマッドは「特別な」子どもとして近所をうろつく自由を認められた下町っ子(ストリートボーイ)だった。

「私は自由放任で育てられ、まったく正統派的な育ちではなかった。家庭で何か指示されることはほとんどなく、両親は私が良い子だからうまくいくだろうと考えていたのだった」(HRC 29・6)。しかし、両親の交友関係はないも同然だった。友達を訪ねることもなく、他の家族と交わることもなく、彼らはアウトサイダーと見なされていた。

親類とのつきあいはすこしはあった。マラマッドはとりわけ父の妹で、家族の中では元気で下品なジョークを飛ばすフリマ(またの名はフロレンス)のことを覚えていた。「ブルックリンのチャーチ街で路面電車を待っていたとき、彼女に会ったことがあります。私にりんごをくれて『食べなさいよ。お通じにいいのよ』と言いました。彼女の最高の悪態のなかに『あの女に足を洗わせてその水を飲ませなさいよ』というのがあるんですよ」(Family History)。マラマッドからみてなにより大切なことは、軽薄なフリマが結婚してはいたものの自分の子どもがなく、「バーンは特別だということがわかっていたように思えた」ことだった(HRC 29・6)。アメリカ風にチャールズと改名していたバーサの兄カシール・フィデルマンは、自分の妹には「生きていく才能も想像力もあるが、マックスにはそれがない」と思い込んでいた。フィデルマン家はイディッシュ語演劇の生活に深く関わっていた。カシールはアメリカに来る前にアルゼンチンで戯曲を書いたことがあり、マラマッドは初めのうち自分の創作の才能は母方から来たのではないかと思っていた。15歳のとき、マラマッドは名声と財産を手に入れるべく運命づけられていると信じたのはカシールだった。新しくきた継母と家庭内でうまくいっていなかった少年の話を聞いてやったのもカシールだった。後年、マラマッドがカトリックの妻と結婚したとき、マックスが異教徒と結婚した息子を拒絶したとき夫婦を迎え入れたのもカシールだった。

店の中は主としてイディッシュ語の世界だった。マックスとバーサはユダヤ新聞、デイリー・フォワード紙しか読まなかった。マラマッドの思い出では、家の中には背表紙が壊れたイディッシュ語の本以外には本も雑誌もなかった。少年に何を話しているか知られたくないときには両親は母語であるロシア語で話すという手を使った。

> 彼女とマックスはよく喧嘩をしていた。私の記憶では、主としてマックスがどこに唾をはいたとか、彼が子どもたちの前でどんな格好で歩き回ったかといったことをめぐって激しい喧嘩になっていた。当然ながら、子どもたちはこうした「けんか」に怯えていた。あるときバーサはバーナードに、もしマックスと別れたら彼女と来るかと尋ねた。彼は泣いた。それで彼女は「いえ、しないわ。坊や」と言った。(HRC20・2)

マラマッドが、屈強な炭鉱夫と、バーサ同様もっとましな生活を送れたはずの貴婦人という釣り合いのとれない両親の自伝的な語りである、D・H・ロレンスの『息子と恋人』に夢中になったことは不思議ではない。マラマッドの心を捉えたくだりは、ロレンスが父親について「自分の中の神を否定した」という部分であった。ブルックリンの父親というものは本来、「ユダヤ人であり、一人前の男であり、ほとんど文字通り神の似姿で創られている」べきものであった。(*Life Is With People*,296)ロレンスのウォルター・モレル同様、マックスはよく床に唾を吐き、長下着姿でおかまいなしに子どもの前を歩き回った。マラマッドがダニエル・スターンに語ったところによると、日曜に家庭で彼ができることといえば、せいぜい居間の窓から聞こえてくるよその家のピアノの音にあこがれを抱いて耳を澄ませることくらいだったのだ(TH、12)。「私は近所の家々の誰か、おそらく私と同じ年頃の女の子が奏でている音楽に心を動かされ、もっと聞きたいという渇望を抱いた」

(HRC　33・8)。

マラマッドの同級生だったジョージ・マルコヴィッツ(現在はマーティン)は、嗄れ声で禿頭のがっしりしたマックスが「人生の、ユダヤ人の人生の苦難」についてどう見ていたかを記憶している。「彼の父は—初めて彼の父に会ったときにその言葉は使わなかったけれど、今思い返してみると、私が思い当たる言葉は『気難しい』になるでしょう。彼の父は、こう言うでしょう。『何を期待しているんだ？　人生は厳しくて苦難に満ちたもので、それに耐えて生き抜かなきゃならん』とね」

マラマッドは父が長いマッチを灯して、自分以外の誰かの為に何かをしたいと思ったという点で、アメリカの社会主義者、ユージーン・V・デブスをたたえたり、またあるときは初めてアメリカに来たときに夜学で習った短い詩を暗唱しながら、マッチが燃えるのを見つめ、最後の瞬間に葉巻に急いで火をつけていたことを覚えている(HRC 33・8)。しかし、彼は自分の周囲に起きていることから顔を背けざるをえないこともしばしばある人間でもあった。バーナードが短編「食料雑貨店」の冒頭で書いていることはユージーンも記憶していることだった。セールスマンの毎週の営業の相手をせずに、片目を閉じて放心して注文も出さずにいながら、がっくりきたセールスマンが電話もかけてこなくなると頭にきて、ナショナル・ビスケット・カンパニー(訳注　現在のナビスコ社)に怒りに満ちた葉書を口述して送ったのだ。「どこに隠れているんだ？　死んだのか？」マックスの死後、ユージーンは1954年9月24日にマラマッドにこう書き送っている。「とうさんは誰に対しても、自分が何を必要としているかとをわかってもらえるような努力をしなかった」それ以前の1954年4月3日の手紙には、「もし父さんが愛情の表し方をもっとわかるようになっていたら、たぶん僕たちはもっと幸せだっただろう。それとも、父さんは、危機的な状況や非難への応酬にもかかわらず、心の奥にある、まぎれもない、強く、ゆるぎない愛を僕たちに見つけてほしいと本能的に求めていたのだろうか」と書いている(HRC13・1)。おそらくそうした言わず語らずの思いは、作家の想像力を試すものかもしれない。実際『アシスタント』創作のノートには(その時は「見習い」というタイトルがつけられていたが)、マラマッドは、その64頁に、小説版の店での家族の暮らしを描いている。「貧しさはひとを孤立させるものだ。この家族には内に秘めた愛があった。たしかなものであったが、他の形ではないも同然だった」(HRC19・1)。愛は生活苦のさなかに見失われたかもしれず、言葉にしないせいで埋もれてしまったかもしれない。ユージーンはこうした情緒的に複雑で言葉にうまく表せない家族内のコミュニケーションをよくわかっていた。彼は1955年に「とうさん」が心臓発作で入院した——1か月後に亡くなったが——ときの会話を兄にあてて書き出していた。

> ユージーン「とうさん、明かりは邪魔？」
> 父「ああ。邪魔だ。お前もそうだ」
> ユージーン「ごめんね(明かりを消し、ばかみたいに屈辱を感じて出ていく)」
> ところが翌日僕がこういった。「とうさん、明かりは邪魔かな？」
> 父「いや。邪魔じゃないさ。お前もわしの邪魔じゃないぞ」(HRC　13・1)

この男は悔恨というものを知っているのだ。

しかし、息子も知っているとおり、店は彼を狭量にし、抑圧した。他の暮らしを見つけるてだてもなく、この抑圧は彼が息子たちへと伝えるものとなった。

> 息子たちは二人とも、父に自分たちが成し遂げたことをちっぽけなことだと言われて、けなされることがしばしばだった。父としては悪意はなかった—そういうたちだったのだ。息子たちが何を成し遂げようと彼は鼻先であしらった。秘かに喜んでいるようだったが。彼の態度はまるでこう言っているようだった。私から生まれたものが何かを成し遂げるなんてことがありうるだろうか？　それほど直接的ではなくとも、彼のけちをつけるような感想の裏にはそうした態度がいつもあるようだった。物事はときどきは「うまくいっている」こともあるだろうが、決してずっとそうであるなんてことはない、と。(HRC20・2)

彼は「愛はあっても、夫として、父親としては想像力を欠いていた」とマラマッドは結んでいる。ストイックな重労働にもかかわらず、「想像力を欠いて」いるという言葉は、人生に対する、勇気をくじくような、恐怖に満ちた不信感を前にして、息子がそれ

にかわるものを必死に想像力をから求めたもののしるしなのである。いつも彼が「可能性」や「自由」と呼んでいた感覚である。

だが、マックス・マラマッドは容易に感動するたちでもあり、人が病んだり、困っているときには非常に親切にもなれる男だった。マラマッドが9歳のとき20巻の子供向け百科事典『知識の本』を買ってもらったのは、病気をしたせいであった。彼は肺炎になって、ひどく母親を怖がらせた。ジギタリスを注射して心臓が再び動き出した時、医者はもう少しで臨終を告げようとしているところだった(HRC29・6)。彼の回復を祝ったこの本は、めったにもらえない贈り物であるだけでなく、マラマッドを英語世界の知識と学問へ初めて導くものだった。彼にとって、それはマックスのくれた生涯最高の贈り物だった。

彼のいとこ、マティスの娘であるフローレンス・ホードはおじマックスのこうした思いやり深さを見聞きしていた。後年彼女はマラマッドに、彼の父が理想が高く、感傷的な性格をもつ男で、彼女が詩を暗唱するとそれにあわせてイディッシュ語の哀しい歌を歌ったものだったと語った。若いころは、夜学にも通い、英語、ドイツ語、代数をベン・ベッカーに教わっていた。「父は医学校に行く金を彼に貸していた。ベッカー博士は彼の病床の最後まで治療した。彼が言うには、父は死にたがっていた」(Family History)。父のこういう面については、別のいとこ、マティス・シルバーマンによって裏付けされている。彼はマラマッドに、彼の父がとりわけ教育を高く評価していたことを書き送っている。「教育という魔法のために彼が何かしないなんていうことがあるだろうか？　そう、彼は赤の他人の貧しい医学生と親しくなり、実際彼が医師になる手助けをしたのです。家賃を払ったり、高価な医学書を買ったりするのを援助し、卒業すると、開業して身を立てる手助けもしたのです。こうしたことすべてを、彼は兄の店で重労働に耐えながら成し遂げたのです」(Family History)。マラマッドがダニエル・スターンに語ったところによれば、家族の貧しさにも関わらず、家の中で「金を崇拝するような言葉を聞いたことは一度もなかった」(TH、12)。

フローレンス・ホードはアン・マラマッドにマックスは彼女が幼かったころ、二度とりわけ親切にしてくれたとも語っている。一度目は、母親の財布から小銭をくすねたときだったが、それをおじに告白すると、彼は返せるように金を取り分けておくから心配するなと言った。後に、彼女の母が亡くなり、父が再婚するつもりだということですっかり動転していると彼に話すと、マックスはマティスにフローレンスが高校に入るまで待つように説得した。

しかし、フローレンスがおじとしてマックスに見出したものと同じものを息子が父としてのマックスにいつも見出していたというわけではない。たとえば、マティスに助言したにもかかわらず、マックス自身は再婚した。二度目の結婚は見たところ、誰にとっても良いものではなかった。あきらかに、マックスがリザ(エリザベス)・メロフと結婚したとき、マラマッドは17歳くらいであったが、公平か不公平かはさておき、彼は継母を嫌っており、彼女と再婚したことは父の過ちであると思っていた。後年、彼自身の息子ポールがリザが彼になにも役にはたたなかったのかと尋ねたとき、彼はしばらく考えて、「彼女は私が家を出るのには助けになった」としか言わなかった。1953年ごろに書かれた未発表の短編は、皮肉にも「私がどうやって継母を追い出したか」という題名だったが、それは大きくなった息子を家から出すために父親がどのように新しい女性を家庭に入れるか、という、不安をかきたてる暗い喜劇的な語りであった。だが、また1951年の回想録ではつぎのように中立的に書かれている。

> バーサの死後2年の間、……マックスが料理をし、彼とバーナードがそうじをした。後に、彼は再婚したが、相手の女性は彼の暮らしぶりになれてはいなかった。彼女は「新参者(グリーンホーン)」で、子どもたちにどのように接していいかわからなかったし、子どもたちのほうもそうだった。彼女は店の仕事に専念した。家族生活は依然としてないも同然だった。しかし、彼女の抜け目なさがマックスがはまりこんでいる経済的陥穽から抜け出させてくれたのだ。子どもたちはどちらも、継母に対してなんら愛情は抱けなかった。(HRC　20・2)

抜け目なさとは、ある点ではタフさのようなものかもしれない。そのタフさは二番目の妻ベッシーが見事な短編「借金」で見せているものである。彼女は、

ロシア、ポーランドや、ドイツで過去に経験したはなはだしい危険ゆえに、彼女のやわなパン屋の夫が長く疎遠であった友人に金を渡すのをがんとして阻止しようとする。「新参者」、つまり新しくやってきた国のやり方をまだ学んでいない最近来た移民であるため、リザには自身の心乱れる過去の記憶があるのだ。ロシアでは、彼女は比較的裕福で、結婚して子どももいたが、それから彼女の身の上に恐ろしいことが起きたのだった。アン・マラマッドはリザの夫と息子たちは大虐殺(ポグロム)で殺されたのではないかと考えていた。いずれにせよ、1949年1月1日に兄に書き送った手紙で、ユージーンは「父さんは彼女と結婚した最初から閉経が始まっていたか、始まるところだったと打ち明けた」と書いている(HRC12・8)。かなりの気分の変動と、マックスが彼女を連れて外出するのを嫌がることから始まる夫婦喧嘩と彼女の長く鬱々とした沈黙があった。ユージーンは1950年3月15日にこう書いている。「僕はとうさんが二度目の妻を精神病院に入れないですめばいいと思っている。そんなことになったらとうさんは死んでしまう」(HRC12・8)。

後年、マラマッドが過去の家庭生活が世代を重ねて正常化していくのを垣間見て喜んだことは驚くにあたらない。チャールズ・コペルマンは、マラマッドにとって母方のおばにあたるアンナ・フィデルマンの孫である。彼はマラマッドが名声の頂点にあった1969年1月の自分のバーミツヴァの夜をこう記憶している。

> 彼は金曜の夜にアンを連れずに一人で家に来ました。祖母は彼が入ってくるのを見て、ただ彼を見て、そしてこう言いました。「お前、散髪しないと」そして彼はこう言いました。「わかったよ」彼女は彼を浴室に連れて行って、シャツを脱がせました。彼はぜんぜんもったいぶったようすもせずに、ただ下着のシャツ一枚で彼女と坐っていました。彼は鏡の前に坐って、祖母は彼の髪を刈りこみ、髪も他のところもきちんと整えました。そして彼はおしゃべりしていました。彼が彼女に求めていたものの多くは、自分が得られなかった母親の愛情なのだと思います。でも、彼が髪を切ってもらっている様子はちょっと子どものようでした。なぜなら、彼のおばは、彼は髪を切らなくちゃ、だって明日はバーミツヴァだからと言ったんです。

数年後、チャールズと彼の弟ケニーはニューヨークのマラマッドのアパートでのクリスマスパーティで出会い、いつものようにお互いにキスしたが、マラマッドはそれを見ていて大声をあげた。「ほらあれを見て！　僕は一度も兄弟があんなふうに挨拶するのを見たことがないね！」チャールズが11歳のときに彼らの父は死に、マラマッドが喪中の家（シヴァ）(訳注　ユダヤ教の葬式の後の7日間の喪の期間)に来て、少年を書斎に連れて行き、こういった。「もし何か必要なことがあれば、私に頼めばいいということをわかってほしいんだ。自分があげられるものなら、なんだってあげるから」祖父の死後に未亡人アンナが住んでいた建物が取り壊しになるとき、マラマッドはあんなの娘、チャールズの母、ジーンにこう言った。「もし君たちが彼女を引き取る余裕がないなら、僕が引き取るから」だが、チャールズもジーンも、マラマッドが自分の新しい家族をフィデルマン一族の残りの人々と、本当には親しく交わることがなかったことを残念に思っていた。「彼が我々と一緒にいる時間は、切り離された別の時間のような感じがしました」

たとえそうであれ、そうした思い出は心を和らげる記憶であり、他の人々の痛みを和らげることによって、彼自身の痛みを和らげるものだった。だが、それ以外にマラマッドがとりわけ記憶していることがあった。それは父と金と家族の中の誠実さであり、それはさらに苦痛を伴うものであるがゆえに、慎重に明らかにする必要がある。

マラマッドの娘、ジャナの回想録中で、彼女が食事時以外にパンを食べたかどうかと父から尋問され、彼女は断固としてそれを否定した思い出を語っている。それはたった4歳のときのことだった。父は彼女に古典的かつ典型的でアメリカ的な正直さの必要性についての話をしてきかせた。どうして若きジョージ・ワシントンが嘘はつけないと言ったか。アブラハム・リンカーンが食料雑貨店で働いていたとき、うっかりしてある女性に5セントか10セント余計に請求してしまい、どうしてその代金を返しに雪の中を裸足で走って追いかけたか。彼女が今思い返してみると、ちょうどそのころ、彼女の父は『アシスタント』を書き終えようとしているときだった。そ

の中で、食料雑貨店主モリスの娘は、父が貧しいイタリア人の女性がカウンターに忘れて行った5セントを返そうと、ほとんど愚かしいまでにただ誠実さのために、雪の中を2ブロックも走って追いかけたことを思い出すのだ。モリスはマックス・マラマッドをモデルにしていた。父として、作家として、息子としてのマラマッドをほとんど同時に見事に垣間見ることができるが、この三者は特徴的に彼の心の中の深いレベルで関わっており、それでいて別のレベルでは互いに少しずつ違っている。

しかし、誠実さはまた問題でもあった。ジャナはこう書いている。「若いとき、私の父はマックスのような誠実さが彼を同時にまた閉所恐怖症的な人生へ閉じ込める罠になっているのではないかと、私の父は思ったかもしれない。あるいは、彼の野心のために、自分が不誠実だと感じさせられたかもしれない。虚偽の主張をしたいという欲求とか、子として本当のことを言いたくないという欲求がそう感じさせたかもしれない」(MFB、14)。とりわけ、彼女が覚えているのは、マラマッドもダニエル・スターンとのインタビューで認めているところだが、誠実な食料雑貨店主もかつて、事実に基づいていると主張して、長々と話を苦心して創り上げていることに対して、少年をけなして「はったり屋」呼ばわりをしたことが、生涯彼をどのように苦しめたかということである(TH、26)。これはバーニー(訳注　マラマッドをさす)が長じている才能であり、映画でみた話を、行けなかった子どもたちに話してやり、彼の想像力の見返りに皆の関心と賞賛を集めた天賦の才であった。しかし、それに対して、単純な人間の単純な苦情としての彼の父の非難がある。それはあたかも、彼を小説家に導いたストーリーテリングの才能が、そして結局その小説家が貧しい食料雑貨店主の誠実さを弁護することになるわけだが、その才能が、嘘つきの才と同じくらい悪いものに基づいているということになるのだ。

しかし、さらに悪いことが、物語を語る彼をはったり屋と呼んだ父の記憶の陰に潜んでいる。マラマッドがノートをとるのによく使っていた小さな白い紙が、彼が死んだ日に机の上に置き忘れられており、それはテキサス州オースチンにあるマラマッド関係の書類の中に見つけられる、小さな告白である。

> 私は父のレジから 25 セントを盗んでいた時期があった。ある日曜日父は私を捕まえて、私は恥辱のあまり死にたいと思った。おそらく私はそのときそうするべきだったのだろう。最初私は否定した。彼は私のことをはったり屋と呼び、コインを彼に渡させた。(HRC20・3)

これは、フローレンス・ホードや無数の子どもたちがしたことの別バージョンに過ぎないもので、どちらの場合も金は返さなければならなかったのだ。マラマッドよりはるかに裕福な家庭の同級生たちは、彼らは持っていないのに、バーニーがいつもポケットに15セントや25セント硬貨をじゃらじゃら入れていたことに気づいていた。当時 25 セントあればジャガイモを5ポンド買えたことを忘れてはならない。この少年は友達を店に連れてくることは恥ずかしがっていた。しかし金は彼にある力、友達に何かを買ってやれるという意識、女の子たちに良い印象を与える機会を与えた。ジョージ・マーティンはこう述べている。「私は彼が持てなかったものや人生が彼に与えなかったものについて同情していました」

しかし、マラマッド自身はこれを赦すことはできなかった。もし父が彼をまたはったり屋よばわりするようなことがあれば、それは彼の物語があるレベルでは見せびらかしであるだけでなく隠蔽であることを思い出させるのだ。彼の物語は、欲求と罪、盗みと隠蔽とに結びついていた。とりわけ、彼が父から金を盗んでつかまる恥にみちた物語は、娘に伝えておきたいものではなかった。ジャナは、1985年においてなお、マラマッドが無料のチケットを手に入れようとして、映画の上映告知を近所の店から盗み、父の店にそれを置いていた話をするのがどれほど苦痛に感じていたかを述べている。彼女は父に物語をせがみ、自伝を書くことを考えてもらうか、または伝記のための資料を残すようにしようとしていた。私はりんごを盗んだよ、高架鉄道をコニーアイランドまでこっそりただ乗りしたこともあった、と彼は言った。だが数分後には、自分が告白して彼女が録音したテープを消すようにと言い出すのだった。「たいていの話上手な人たちは 60 年後も話の巧みさを楽しんで、笑うでしょう。でも彼にとってその話をすることはほとんど耐え難いことだったのです」—

—その理由の一つは教師のごとき模範となりうる父親でありたいと望んでいたからであり、また別の理由は彼自身が育ち、痛みに満ち、恥辱に満ちた家族の貧困から、彼自身と彼が作った家族とを守りたいと常に望んでいたからである。また、もう一つの理由は、「彼の内に怒っている、貧しい少年がいて、自分のものではないとわかっているものを奪い取りたいと思っているからでもありました。彼の精神生活はそれほど変わったものではありませんでしたが、かれの社会的な人格は彼が望んでいるより大きな人間像とは適合しなかったのです。私が彼を理解するころまでに、彼は自分の借りを返すことについては細部にわたってうるさくなっていました」(MFB、56)。

そのかわりに、記憶は創作に取り込まれた。間接的でこみいったやりかたで、マラマッドが作家として最も愛したこと、彼自身の経験の諸要素の修正と変容へと向かったのである。それは彼の多様な家族の葛藤やアンビバレンスの変更やひねりにおいて、彼が「コンビネーション」と彼が呼んだものである。「私はいつもコンビネーションの可能性において、ぎょっとさせるのではなく、意外に思わせたいのです」(HRC27・5)。彼はいつも、自伝的な本質は自伝的な細部ではないと言っていたのである。

しかし、父との関係に関することになると、創作は単なる視点の変化から生まれたというよりは想像力から生まれたのだった。パリス・レビュー紙の「執筆する作家」インタビューシリーズ用に、マラマッドがダニエル・スターンに渡した 60 歳の誕生日のインタビュー録音に隠れていたものは、テープ起こし原稿にはあるが最終的には印刷されることのなかった父・息子関係の物語である。

> こういう経験をしたことがあります。彼の店の前を通りかかると、彼は坐っていて、店の中は奥の壁にあけた小さい窓まで全部見えていましたが、彼がテーブルに坐って、新聞を読んでいて、私は彼に対して強い心の震えを感じたのです。(LCII・14・1)

マックスは、客を求めて渇望にみちた顔つきをしていた。そんな風にしていることはよくあった。バーサが病に倒れてから、マックスは彼が「ドリムル」と呼ぶ午後の休憩を二階の部屋でとることができなくなっていたので、店のドアの音に耳をすませながら店の裏で落ち着かないうたたねをしていた。それから目を覚ますと、水を顔に叩きつけ、日々の悪夢へとまっすぐ戻っていった。「彼が店に入っていったとき、だれもいないときもときどきあった。あたかも誰かがそこにいたのに、どこかへ行ってしまったようだった。そこども私の父には口には出せなかったのだが」(HRC33・8)。当時マラマッドは大学に通っており、それまでよりもっと外側から店の窓から中を覗き込むことになった。

> それで、私はこう感じました。なんということだろう。ここにいるこの男は一日 16 時間ここに坐り、店に誰かが入ってくるのを待ち続けていたのだと。なんというひどい人生の、人間存在の、そうしたものすべての浪費だろうか。なぜそんなことをするのか？なぜ、彼はこのように自分を不当に苦しめるのか？そうでしょう？これは一種の投獄状態です。そのことを意識し、彼にとってもっとましな状態を望みました。彼にとてもつよい同情を感じました。彼は善人でした。思いやりもある男、親切な男でした。私は、おわかりでしょう、いつまでも変わらず彼にはただ感謝の気持ちを感じているのです。(LCII・14・1)

彼は店から離れ、前を通り過ぎ、外側から中を覗き、内側から見たところを心に再び思い描いた。混乱させ、痛みを伴う憐れみといら立ちの交錯の中で、——「強い心の震え」——マラマッドは「彼にもっとましな状態を望んだ」のである。しかし、そうするかわりに、息子は自分自身にもっとましな人生を求めざるを得なかった。心の中での同情と、それを相殺する距離と、さらに逃避への欲求とは、密接に結びついていた。1980 年 7 月に彼がつけていた回想録のためのノートで、マラマッドはとりわけ一つのテーマに可能性を見出した。それは、「マックス、バーサ、ユージーンの観察者」としてのマラマッドであり、「感情移入しつつ客観性と自由を求めて闘う、アンビヴァレント」なマラマッドであった。彼が「同情の誕生」と、その次の言葉、「悲しみ」を深い意味を込めて並置している。それこそが、彼をして作家ならしめた、より「客観的」と彼が呼ぶある視点への転換であった。忠実な愛情と苛立ちを隠せない批

判の間で引き裂かれて、マラマッドは、あたかも初めてのように父親を別個の人格として見たのだった。それは価値判断の修正となった。

「彼は私をはったり屋と呼んだ」この文章自体は、その記憶がまず最初に 1932 年にエラスムス高校で賞を受賞したエッセイ「人生―カウンターの後ろから」の中に含められた。マラマッドが動きが遅いと、マックスは腹をたてて客の前で彼に恥をかかせた。あるとき、身なりの立派な女性が、彼にあるチーズをスライスさせておいて、欲しかったのは別の種類だったと言い立てて彼に恥をかかせたことがあった。父は、「人生―カウンターの後ろから」にそう書いてあるところによれば、彼を援護しなかった。客が常に正しいというわけだった。彼女は「きわめて明確なかつ完璧な発音で『ばか』と言って店を出て行った」彼は賢い少年だった。だからこのような奉仕は好まなかったのだ。しかし、また学ぶこともあった。

> サミュエル・ジョンソンは、誠実であることは良いということを母親から学んだ。教科について詳しく書かれた分厚い本は彼になんら新しいことは教えなかった。私は誠実であることは良いということを両親から学んだ。しかし、誠実でない人々と接した経験や彼らの不誠実さのもたらす結果について知ったことは、私にとって千冊の本にも勝ることを教えてくれた。

こうした不誠実な人々の中には銃を構えて父の店を襲った二人の少年もいた。数か月後にべつの事件で二人の刑事が彼らを逮捕し、確認のために店に連れてきた。しかし、審判の数日前に、二人のうち年少の方の両親が店に来て、マックスに訴えを取り下げるように懇願した。マックスはある重大な理由からそうしてやった。「たぶん私と弟のことを考えたのだと思う」一年後、その少年が店に来て、顔を真っ赤にして名乗った。彼は更生し、結婚する予定だった。彼は二度目の機会を与えてくれたことに対して食料雑貨店主に感謝し、今は幸せとは何かがわかったと言った。

それからしばらくたったある日、誉れ高い学生となっていたマラマッドにある食肉のセールスマンがこう言った。「あの日のことはきっと見てるんだろ。それにあいつらからいろいろ聞いているはずだ。ちょっとした本が書けるんじゃないか」しかし、野心家で賢くもあったマラマッドはそれに対して沈黙で答えた。それについては大作（ビッグブック）を書けるし、書いて見せると。それは「人生―カウンターの後ろから」という題になるだろうと。

実際には、それは『アシスタント』(1957)と題された。これはエラスムスでのささやかなマニフェストが実現に貢献したいくつかの短編から、特に「食料雑貨店」(1943)と「生活の代償」(1950)から生まれた大作（ビッグブック）である。

「彼にはもっとましな生活を望んでいた」はこの 2 つの作品に共通して響いている基調音である。彼の死後まで未出版のままであった「食料雑貨店」では、店主のサムと妻がつぶれかけの店で喧嘩をしている。―「どうかお願いですから」彼女は気取った口調で言った。「どうか私に向かって話すときには敬意もってくださいな。食料雑貨店主が私に向かって口を利くたびにつばを吐くなんてことがおこるようには、ごめんなさいね、私は父の家では育てられていないんですもの」サムは昼寝をしに二階へ音を立てて上がっていき、うかりして火をつけずにガス栓をあけてしまい、もう少しで妻を悲惨な目にあわせる結果となるところだった。

二つ目の作品では、食料雑貨店主はカメネッツ・ポドルスキー出身で、やはり名前はサムとされており、すぐ隣にできた新しい食料雑貨店と競争に惨敗するという問題で妻と対立するはめになる。27 年の労働の果てに彼は何を手にしたのだろう？「おきるときにはひどい平手打ちでもくらったようで、頭を、頭蓋骨を下に下げないと体の骨も曲げられないような思いをして一日 16 時間の重労働。この時間、この仕事、この年月、ああ、私の人生はどこにいってしまったんだ？」夫婦は店を売り渡し、サムが思い出すことも耐えがたい辛い思い出は店に残したまま去る。

1981 年 8 月 16 日ニューヨークタイムズブックレビュー紙に掲載された「作家と親」という記事の中で、マラマッドはミチコ・カクタニに 1950 年 3 月にハーパース・バザー紙に「生活の代償」が掲載されたとき、そのコピーを父親に送ったことを話している。「私たちはあまり話はしませんでしたが、私が

作品を父に送ったことは、父に近づく方法でしたし、私にできることを父に見せるためでもありました。父はよくわかってくれたと思います。父にとって、ものを書くということは、新しい地平同然だったのです」書くことは教育の輝かしい成果であった。マックスは息子には弁護士になってほしいと思っていたのだが。しかし、ものを書くことはうまく話ができなかったことから生まれてもいた。マラマッドがベニントンの同僚であったレインハード・メイヤーに語ったことは非常に重要である。「彼がものを書いているとき、彼独特の言葉で書いているとき、彼の心にあるあの独特のひびき(ヴォイス)は、彼の父の話しぶりの記憶の中のものなのです」

2つの物語の筋は『アシスタント』におけるフランク・アルパインの物語と組み合わされた。フランクは、まず最初に「人生—カウンターの後ろから」にある食料雑貨店で強盗を働く若い覆面の二人組のうちの一人として登場し、しかしその後ひそかに老人のために無料で奉仕するためにひそかに戻ってくることになるが、それからまたレジから小銭をくすね始める。マックスはモリス・ボーバーとなったわけである。しかし、貧しく、飢えを抱いた青年、裏切者の盗人で嘘つきのフランクのほうは、ポケットにいれる小銭を欲しがった10歳の息子からこっそりと生み出されたのだった。

この小説のマラマッドの二度目の草稿では、フランクが食料雑貨店主に、なぜもうけを増やすために客に対して微妙なごまかしをしないのかをたずねたとき、彼はこういっている。

> 「いったいなぜ私から盗まない人から盗もうなんてするものかね？」
> フランクは顔を背けた。
> 「誠実にしていれば、心がきれい(クリーン)だと感じるものだ」とモリスは言った。
> 「わかります(アイ ノウ)」フランクは答えた。
> しかし、彼は盗み続けた。彼は2、3日やめることもあったが、それからやましさが薄れると、またもや盗み始めた。ときには盗むことで気分がよくなることもあった。(LCI2・2, 82頁)

草稿においてさえ、つまりはでっち上げた嘘の最後の仕上げ前の状態においてさえ、段落の構造が、習慣的には隠されて否定されているものに対して、静かに、かつ見事なほどに、ひとをたじろがせる沈黙のことばを与えているのだ。フランクは、ずば抜けて優秀な、はったり屋の悪い息子なのである。マラマッド自身と同様に、フランクは、自分の心がモリスとは対極にあってきれい(クリーン)でなく汚く(ダーティ)感じるという裏返しの意味で「わかって(ノウ)」いるのである。しかし、それにもかかわらず、彼は過去の行為を繰り返しながら、かつそれに抗うこともやめないのである。彼は依然として、道徳的な善良さ(グッドネス)には陥りたくないという死にもの狂いの気持ちを抱きつつ、気分よくあろうとする。それでいながら「自分には理由はわからないが、ときおり、いやな気分になってしまう」マラマッドにとっては、まさに理由がわからないところから芸術が生まれるのである。

ずっと後になってから『ドゥービン氏の冬』執筆の校正段階で、マラマッドは「人生—カウンターの後ろから」で言及したサミュエル・ジョンソンを再び取り上げ、9章の出だしに次の段落を付け加えた。

> 彼は、ジョンソン博士が、かつて父が露店を出していたユトクシターの市の立つ広場に、雨のなかで帽子もかぶらず立ちつくしていたという話を覚えていた。その昔、年老いた本屋の父が、その日は体の具合が悪かったのでかわりに行ってくれと頼んだのに、息子はこれを断ったのである。「プライドが許さなかった」のだ。それから50年後、老人となったサミュエル・ジョンソンは、この市まで出かけて行くと、かつて父が使っていた屋台のかたわらで雨に打たれながら1時間立ちつくし、亡き父のために昔断ったことを果たそうとしたのだった。

これもまた、マラマッドが人にはわからないように隠されたことばで書いた、今は亡き父へあてたサインであったのだ。

というのも、『アシスタント』が始めたことを『ドゥービン氏の冬』が終わらせたのだから—マラマッドが肯定しつつ否定した自身の継承との和解である。1979年にマラマッドは『ドゥービン氏の冬』を「マックスとバーサ、私の父と母」の思い出と、まだ生きている「アンナ・フィデルマンへ」捧げている。

これは彼らの過ごした 20 年代とは全く違ってしまった世界における結婚と中年の危機の物語である。

『ドゥービン』(当時は『ペテン師』というタイトルがつけられていた)執筆の準備として、1970 年の 4 月から 1971 年 10 月の間に纏めたノートでは、マラマッドは 26 頁に主人公についてつぎのように述べている。「彼は、自分のほうが本をより多く読んできたことを除けば、移民である父親と似ている—(それとは気づかずに)人生に恐れを抱いているのだ。彼は自分の性質が父親のそれといかに似ているかに気づいてひどく驚いている」33 頁には、彼が自分のことを「母親の死後、ある意味では一生ずっと、女性的なるものを恋しく思って」いると述べている(HRC19・3)。

今もマクドナルド通りに住んでいるブルックリンの昔からの隣人であるモエ・モスは、新聞で今は有名になった作家の写真を見て、1963 年 10 月 14 日にマラマッドにあてた手紙で「あなたは私が初めて会ったころのマックスに、本当に、とてもよく似ている」と書いている。『ドゥービン』を読んだ後、1979 年 6 月 26 日に彼は再び手紙を書き、「あなたがマックスとバーサに捧げたことで、社会主義者の社会を夢見てカウンターの後ろに立っていた『やさしいマックス』の思い出がよみがえりました」と述べている(HRC9・2)。

略語および出典

CBM: *Conversation with Bernard Malamud*, ed. Lawrence Lasher . Jackson: University Press of Mississippi, 1991.

HRC: Malamud Papers, Harry Ransom Humanities Research Center, University of Texas at Austin followed by box and folder numbers

LC : Malamud Holding, Library of Congress

MFB: Smith, Janna Malamud. *My Father Is a Book.* Boston: Houghton Mifflin, 2006.

TH: *Talking Horse: Bernard Malamud on Life and Work,* ed. Alan Cheuse and Nicholas Delbanco. New York: Columbia University Press, 1996.

Davis, Philip. *Bernard Malamud: A Writer's Life.* Oxford: Oxford University Press, 2007.

Malamud, Berard. The Assistant. New York: Farrah, Straus & Giroux, 1957.

——*Dubin's Lives.* New York, Farrah, Straus & Giroux, 1979.

Smith, Janna Malamud. *Private Matters: In Defense of the Personal Life.* New York: Basic Books, 1997.

Zborowski, mark and Elizabeth Herzog, *Life Is With People.* New York: Schocken, 1952,1962.